

ザンパネッロ・サジ

パリ特派員の日仏比較観察論

ジャポネとフランス



わがフランス体験——水を得た魚のように（まえがき）

私は、ロンドン特派員（一九五九～六三年）としてドゴール時代のフランスを外側から観察し、パリ支局長（七〇～七三年）としてボンピドー時代のフランスを内側から観察することができた。英国のEC加盟申請に対するドゴールの有名な「ノン」にまつわる取材を、出向先きのロンドンのロイター通信本社デスクでやったとき、同僚の英国人記者たちと今後の見通しを語りあった。結論は「ドゴールの寿命待ち」だったが、まさか一〇年後にパリで、ボンピドーの「ウイ」にまつわる英国のEC加盟を取材しようとは想像もしなかった。

またロンドン時代、ベトナム戦争は「遠くの事件」だったが、その数年後にパリで、ベトナム和平交渉の取材をやっていた。いずれも、世界史に一大転機をもたらした事件を取材、報道できたのだから、国際通信社の記者としては本懐のいたりである。

*

日本ではいまだに、英国は紳士の国だというイメージがあるらしい。私はロイター通信本社で、数百人の英国人記者のなかの唯ひとりの日本人記者として五年間一緒に働いたが、自分が紳士の国にいるなどと思ったことは一度もなかった。たしかに紳士はいる。だがそれはほんの

一握りの上流階級の存在だ。だから英国人の口から、「わが国は紳士の国だ」ということを聞いたことがない。ところが彼らの口から、「日本はゲイシャの国だ」という言葉はいやになるほど聞かされた。そのつど私は憤慨したものだが、よく考えてみると、日本をゲイシャの国だというのも英国を紳士の国だというのも、まったく同じことではないか。

そして今度はフランスにみると、これが「文化の国」だという。たしかにフランス文化は優れているが、それは現代のフランス人がすべて「文化人」だということにはならないし、第一そんなことはあり得ない。もちろん、フランス文化を代表する教養の高いフランス人はいるが、それはあくまでも一握りの存在であり、一般のフランス人は、うまい料理にうまいブドー酒、バカンスにマイカー……という生活に生き甲斐を感じるところで、文化や芸術とはあまり関係がない。

しかし、その「生活の楽しみぶり」たるや世界に比類のない「名人芸」であり、それが一般にも行き渡っているという点では、フランスは問題なく「文化の国」かもしれない。パリ名物の浮浪者もその例外ではない。支局の近くに「住みついた」中年の浮浪者夫妻——少なくとも二人は夫婦気取りだった——は、食事ときには路端においた空箱にテーブルクロスをかけ、ブドー酒つきでオードブルからデザートまで、二時間近くかけて差し向かいで楽しそうに食べていたし、バカンス・シーズンには姿が見えなくなったから、バカンスも人並みにとっていたようである。

一国の文化の水準を測定することは、きわめて難しい。自称文化国家の総理大臣は落ちつきがなく、昼めしを一五分ぐらいで食べてしまったという。一方、フランスの浮浪者は二時間近

くかけて楽しみながら食べる。果してどちらの文化水準が高いのか。

フランスで毎朝、歯をみがくのは全体の一〇％足らずで、家族五人で一本の歯ブラシを使っている家族が一五％以上もある（七二年三月二四日付ルモンド紙）。この話を日本人にすると、ほとんどが「文化の国フランスで、そんなバカな……」といった意味合いのことをつぶやいて信じようとはしない。もちろん歯科医たちは、もっと歯をみがけと騒ぎたてているが、そうなる歯をみがかないことを主義として「自由」を楽しむ人たちが必ず出てくる。それがフランスなのだ。そしてそのフランスには「生活の質」担当の大臣がいる。

フランスの評論家ピエール・ダニノス氏は、「英国の人口は、 $\times$ 足し算 $\times$ で総計五五五七万人と計算すればよいが、フランスの場合は $\times$ 割り算 $\times$ で、フランスは五一二六万人のフランス人に $\times$ 分かれている $\times$ といわなければならない」と述べて、フランス人の個人主義を浮きぼりにしている。

日本では、個人主義は「糖衣利己主義」として扱われ、個人主義的な言動をなすものは「雑草なみ」にいやがられる。各自の主義を出しあって討議すべき会議で自己主張をすれば、必ず「和を乱す」として指弾を免れない。フランスでは、会議で意見を述べない者は無能に等しいと思われるといっても過言ではない。会議に一〇人出席して、反対意見が出そうにないのとみると、必ず一人か二人が意識的に反対に回り激論をかわす。会議本来の目的を達するためであるところが日本でこんなことをすれば、妨害しているのとられ、変り者扱いされるのだ。

フランス人はレストランで料理を選ぶとき、ほとんど必ずといっていいくらい、各自が違ったものを選ぶ。自分が食べるのに「他人におまかせ」などということはしない。これは個人主

義というよりは、日常生活における自主独立の本能化というべきであらうか。こうしたフランス人の国民性は、無性に私を魅了する。こうして、生活の質が保証されていくわけだ。

*

少年時代にフランス式の教育を受けた私は、フランスに対しては特有の親しみをもっているが、俗にいう「フランスにかぶれた」覚えはない。暁星小学校から中学校でフランス人教師から受けた自主独立尊重の教育が、そうはさせなかったのだと思う。他方、私なりに体得した自主独立の精神が、日本社会ではマイナスに働くこともあるようで、ときとして「和製外人的な扱い」を受けることもある。しかしむしろ、アメリカへの留学、ロンドン特派員生活などがあいまって、私を日本人としての自主独立尊重に走らせたのだと思う。その意味では、フランス生活は「魚が水を得た」思いで、*Yachement chouette*（最高に素晴らしい）だった。

とはいえ、アバタはアバタ、笑くぼは笑くぼである。私の特派員の目に狂いがなければ、フランスの言論の自由は、日本の尺度をもってすればアバタである。しかしフランスには、対米独立、自主外交という大きな笑くぼがある。それは独立の自由を反映したカリスマであり、奇妙なことにアバタが目立たなくなる。本書は、そうした素顔のフランスとフランス人気質を、三年半にわたる取材体験をもとに日本との対比のなかで描き出したもので、これが多少なりとも日仏関係における日本側の「片想い」の是正に役立てば幸いである。

なおわれわれ通信社の仕事は、すべてがチームワークなしではできない。とくにベトナム和平交渉の大詰めの段階で、不動のチームワークを組んで外国通信社と互角の勝負をしてくれた共同通信社の同僚、松本和夫、伊藤力司、佐々木坦、前川桂三、佐々木謙一、林雄一郎、藤原

豊司の諸特派員に心から感謝している。

本書の出版にあたって、サイマル出版会の田村勝夫社長をはじめ、編集部の人訪部大太郎、天野恵二郎両氏に大変お世話になった。お礼を申しあげる次第である。

最後に、私の敬愛するすぐれた国際ジャーナリスト、故・岩立一郎氏の霊に本書を捧げ、その冥福を祈りたい。

(一九七五年二月)

倉田保雄

サイマル出版会のめざすもの

サイマル出版会は、激動する現代史の創造に読者とともに参加する姿勢で、国際的言論活動を展開するべく出発した。国際的言論活動は、人類は平和のために戦争を続け思えば、一つであることを願いながら分裂し続けてきた。科学の発展は、電子情報時代をもたらししたが、情報の同時性は、また単純同一反応性をも生み、新たな誤解に苦悩する結果となっている。われわれは、こうした新たな誤解による相剋の根をとり除くために、また世界の指導国家として再登場した日本の国際的資質を豊かにし、国内の諸課題を鋭角的にとらえ、国際間の理解を深めるための現実的歴史的素材を提供しようとするものである。そして地球上のコミュニケーションを円滑にすることによって人間の条件を回復し、世界が平和に一つに運営統合される事業に、言論活動によって寄与しようとするものである。このささやかながらも高き理想に精進せんとするわれわれに、幸いにして読者諸賢のご支援を期待してやまない。

(サイマルの本の版權記載は、本扉裏にあります)

(著者紹介)

倉田保雄
くらた やすお

1924年東京に生まれる。慶応大学卒業後、時事通信、ロイター、UPI 東京支局勤務のち米国に留学。53年共同通信社に入社。ロンドン特派員、国際局次長などを経て、70～73年パリ特派員。現在、同社海外企画室長。
著書に『夫婦留学・アメリカ通信』『女王のいる共和国イギリス』『セーヌのほとり』、訳書に『ケネディと共に12年』などがある。

ジャポネとフランセ 目次

わがフランス体験——水を得た魚のように（まえがき）

第1部 ● サンティエ街の特派員——聖ド・サールとともに

1 フランス式記者道——ぐいけすのなかの自由

3

2 パリ電話戦争——かからないのが常識の文明国

16

3 それが人生さ——クレペール街のベトナム番

30

4 おしとやかな戦士——「南ベトナムの赤い星」印象記

52

5 ドゴールの弟子たち——未完に終った大統領の物語

62

6 南仏で何が起ったか——「国際事件」に踊らされた特派員

85

7 遊樂生諸君——ある苦いフランス体験

97

8 すぐ謝まる国——テルアビブ赤軍事件

115

9 パリの天皇——フランス人はどう迎えたか

122

第2部 ● ジャポネとフランス ― 日仏比較観察論

1 巷の日本観 ― 悲しきは日本の片想い

135

2 タタミザシオンたち ― 日本研究のフランス人

147

3 パリの人と東京の人 ― マイカー二都物語

158

4 完全主義病 ― 慢性化した日本人の奇病

170

5 脱税天国と税金地獄 ― フランス人の政府疑惑本能

180

6 ポワソン・ダブリール——愚者とユーモア

191

7 ムツシュ・ド・パリ——健在なりギロチン

202

8 両刃の切れ味——ジスカールのフランス

210

第1部 ● サン・テイエ街の特派員——聖ド・サールとともに

1 フランス式記者道——「いけす」のなかの自由

フランスに来てすぐ、フランスには聖フランソワ・ド・サール (FRANÇOIS DE SALES) というれっきとした新聞記者の守護神がおわすのだと聞かされて、ありがたい国にきたわいと思わず喜んだ。

年鑑の「聖者紳士録」のところをみると、各種職業の守護神九八聖者の名前がずらりとならび、Jの項にシャルディニエ (植木屋) とLの項のラブルール (ニコヨン) の間に、ジュルナリストの守護神フランソワ・ド・サールとあり、お祭は一月二十九日となっている。

ジャーナリストのメッカといわれるアメリカにさえ、守護神がいるなどということは聞いたためしがない。

日本流に言うところ「さすがは文化の国……」となるのかもしれないが、三年半にわたる私の特派員生活を通じて見た限りでは、どうもこの守護神のご利益はきわめて少ないようだ。ジャー

ナリストの日頃の不信心を思えば不思議ではあるまい。だが、とにかくこの国の新聞記者、カメラマンは気の毒のように警官に痛めつけられ通しである。

ロンドンに特派員でいたころ、たまたまパリに遊びに来ていて、当時のアルジェリア紛争で市内で行なわれる反政府デモを仏機動隊が鎮圧するのを目撃したことがあるので、フランスの警官隊は荒っぽいという実感はもっていたが、パリ特派員として実際にデモ取材をしてみても、フランスで新聞記者であることの危険が身にしみてわかった。

とにかく、現場の指揮官が一種のクサンブル逮捕の指令を出し、特定地域を指定して、「かれー」と号令すると、その地域にいるデモ隊員はもちろん、新聞記者、カメラマン、一般見物人、外人ツーリストなど老幼男女の別なく一網打尽に捕まえる——という仕組みだから日本のデモ取材とは勝手が違う。フランス人の記者に聞くと、プレススの腕章をつけていると、めだつので警棒でなぐられるし、つけていないと逮捕されるし、これに抗議すると腕章をつけてないからわからんのだと居直られる。また、捕まりそうになって、記者証を見せたら、「記者だったのか、やっちまえ」ということで袋だたきに合うのが関の山で、どうしようもない——とのこと。

「フランスの警察は外国人だからといって容赦しないから、君たちはデモ取材では絶対に深入りしないことだ。機動隊員の教育程度では日本は中国の一部で中国共産主義者の手先でロクなことはやらんぐらいにしか思っていないから、捕まったら何されるかわからんぜ」とフランス人記者が忠告してくれた。

「日本では、デモで警官がカメラマンをなぐった事件で新聞社が共同で抗議したら、警視総監

が正式に陳謝したぞ」と話したら、そのフランス人記者いわく「そのとき、警視總監は正気だったのかな？」

ジョーベール事件

七一年五月二九日にパリでジョーベール事件が発生した。下町で行なわれたデモを取材中のアラン・ジョーベール記者はデモ隊の一人がケガをして倒れたのを見て、近くにいた警備車に乗せて病院に運ぶよう頼んで、その車に同乗し病院まで付き添うことを申し出た。

その場に居合わせた警官はとりあえず負傷者を車に乗せ、ジョーベール記者の同乗を許し、車は病院に向って走り出した。ところが、車の中でジョーベール記者が自分は新聞記者だと身分を明かすと、約一〇人の警官たちが急に暴力を振り出し、寄ってたかって同記者になぐるけるの暴行をしたというのが事件の経過である。この警備車はシトロエン特有のナメコタン張りのような中型バンで、後部には両側に約五人ずつ坐れるベンチがあり、ふだんはパトカー、デモなどのときはうしろに警官を最低一〇人は乗せて警備車として出動する。窓にアミが張っており、犯人護送にも使われたりするので、パリ市民の間ではバニエ（カゴ）のニッケネムで通っている。

ジョーベール記者の抗議でこの警官による記者に対する集団暴行の事実が明るみに出て、ジャーナリスト組合をはじめ新聞、通信社が一斉に強烈な抗議行動を起こすや、警察側はなんと、ジョーベール記者が警備車の中で警官たちに襲いかかったのだとして、逆に同記者を起訴すると発表した。